

# 会長挨拶

勝山 進 (日本大学)

現代会計の重要なキーワードは、「企業価値」であろう。具体的には、企業価値を開示すること、さらに価値創造過程を開示することが求められるようになったが、残念ながら、経営・会計不正による「企業価値」の低下がみられている。ここで問われるのが「コーポレートガバナンス」である。会社法やこのコードが充実しても、企業経営を担うのは人間であり、「制度作って魂入らず」では意味がない。究極は、善悪や正邪の判断といった道德規範といわれる「倫理」である。「倫理」は人間としての生き方の問題であり、普遍的なものであるが、時代や国および宗教によって捉え方が異なることはないのだろうか。「企業倫理」の研究は進んでいるが、グローバル時代であって従前とは違った広い視点で「倫理」を考える必要があるように思えてならない。

それでは、企業価値とはいかなる意味をもつのであろうか。そのポイントは、株式時価総額や将来キャッシュフローの割引現在価値であり、これらの象徴がROEといわれる。しかし、株式時価総額は、実質的な時価総額が反映されているのだろうか。また、わが国企業に対して内外の投資家は、一律にROEの引き上げを求めているが、ROEは資本構成の違い等で業種間でのバラツキがないのだろうか。さらに、資本利益率の計算に問題点はないのか等についての検討が必要である。加えて、企業価値は、ROEを中心とした評価のみでは狭すぎないか。

何故なら、現代社会は、企業の「社会的」価値ともいべき側面の評価を求めている。つまり、環境や社会的責任および社会貢献といった企業と社会との関係をも測定・開示することである。ここに総合的な企業価値評価としての「統合報告」の意義があり、この制度化には、財務会計のみならず、管理会計論と会計監査論からの体系的な研究が不可欠である。

本号は、6本の投稿原稿があったが、嚴重な査読を経た4本が採択された。4本の論文は、中国における社会貢献、CSR経営におけるマネジメント・コントロール・システム、企業の税負担とCSRの関係、そして不確実性の組織化についてである。さらに、特別論文として、スタディグループの最終報告である「付加価値会計の総合的研究」がある。

2016年7月